

農作物の干ばつと高温に対する緊急技術対策 (H25. 8. 16)

〔果 樹〕

1 共通事項

(1) かん水

- ・スプリンクラー等のかん水施設のある園地では、7～10日以上降雨がない場合には1回20～30mm程度のかん水を行う。
- ・かん水施設のない園地では、ホースかん水または土壌かん注に努める。その際は、1樹当たり50～150リットル程度、株元から細根の多い樹冠外周部を集中的にかん水する。
- ・根域の浅い苗木や幼木園では、頻繁にかん水を行う。
- ・かん水しても樹勢が戻らない樹では、再度10～20mm程度の追加かん水を行う。

(2) 除草・マルチング

- ・夏草の刈り払い（敷き草とする）、樹との養水分競合を回避する。また、土壌からの水分蒸発や地温上昇を抑制するため、敷き草等でマルチする。

2 かんきつ類

(1) 温州みかん

- ・適度な乾燥は品質（糖度）向上に有効である反面、過度の乾燥は小玉果や酸高果を増加させるだけでなく、落葉によって減収と隔年結果を招く恐れがある。特に、9月下旬に収穫期を迎える極早生種では、個々の品種特性や果実の糖度・酸度にあわせてかん水を実施する。
- ・「ゆら早生」は軽い水分ストレスでも糖度が増加するため、10日間で2～2.5mmの果実肥大を維持できるように、1回10mm程度のかん水を行う。
- ・「後期摘果栽培」では水分ストレスが強く現れるので、果実の肥大抑制や落葉を招かないようかん水量を増やしたり、かん水間隔を短くする。一方、十分な水量が確保できない園地では、着果の多い樹から早急に仕上げ摘果を行う。
- ・透湿性シートによるマルチ栽培園においては、プレッシャーチャンバーや葉のしおれ、果実肥大等により水分ストレスのかかり具合をチェックし、必要に応じてマルチを開放してかん水を実施する。
- ・透湿性シートによるマルチ栽培を予定している園地では、20mm程度のかん水を2回実施した後に敷設するとともに、かん水チューブによるかん水や雨天時の解放により過乾燥とならないようにする。
- ・仕上げ摘果後の過乾燥で落葉を招いた場合は、着葉数にあわせた適正着果になるよう見直し摘果をする。

(2) 中晩柑

- ・大玉果生産のためには、摘果と十分なかん水が必要である。特に酸高になりやすい「不知火」、「はるみ」等に対しては、早急に1回30mm程度のかん水と小玉果の摘果を行う。
- ・樹勢回復のため、即効性の秋肥、窒素系の葉面散布を施用する。

(3) 害虫防除

- ・干ばつ時ではミカンサビダニ、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマ等の害虫が多発することがあるので、発生に注意し早めに防除する。

(4) その他

- ・高接ぎ樹や着葉の少ない老木樹、移植樹等では、枝幹部に日焼け障害が発生し、樹脂病を誘発させる恐れがあるので、枝幹白塗剤（ホワイトパウダー等）を塗布する。
- ・ため池等の水を樹上かん水する場合は、褐色腐敗病を予防するため、ケミクロンG（5～10万倍希釈）で殺菌する。

3 落葉果樹

(1) かき

- ・乾燥しやすい園では7～10日おきに20mm程度かん水を実施し、果実肥大の保持に努める。
- ・果実着色期を迎える極早生・早生系品種（中谷早生・刀根早生など）では、かん水は少量で行う。
- ・直射日光が果実にあたると日焼けの恐れがあるので、摘葉は注意して行う。

(2) もも、ぶどう

- ・収穫期を迎えている品目・品種では、品質向上のために原則としてかん水は控えるべきだが、5日以上晴天が続き以降も降雨がないようであれば、10～15mm程度のかん水を行う。
- ・すでに収穫が終わっている品目・品種では、樹勢の維持と落葉防止のため、根域の深さに応じ7～14日おきに20mm程度かん水する。

(3) キウイフルーツ、イチジク

- ・浅根性であるうえ葉からの蒸散量が多く、土壤乾燥の影響を受けやすい。過度な土壤乾燥による果実肥大の抑制や成熟遅延・不良を回避するため、かん水が重要である。
- ・根が浅いため、かん水は少量で回数を多くして土壤のしめり具合を一定に保つ。
- ・収穫期を迎えたイチジクでは、裂果防止のため毎朝3～4mm程度のかん水を行う。
- ・キウイフルーツでは、5日おきに15mm程度のかん水を行う。

(4) うめ

- ・うめは浅根性で、夏秋期は、花芽分化や貯蔵養分の蓄積期にあたることから、樹勢の維持と生産安定のためには、早急なかん水の実施と地温の上昇抑制が重要である。
- ・スプリンクラー施設があれば、5～6日間隔で1回20mm程度のかん水が望ましい。
- ・十分な水量を確保できない園では、かん水チューブやホースで樹冠下へ3～5mm相当、1樹当たり100リットル程度の節水かん水を行う。
- ・新規造成園では、レキが多く保水性に乏しいため4日間隔で1回15mm程度の少量多かん水を心がける。また、土壌水分の損失と地温上昇を抑制するため、樹冠下に敷きわら、敷草、有機物マルチ等を行う。

〔野菜〕

- ・敷きわらや白黒ダブルマルチ、アルミ蒸着マルチの被覆等により土壌の乾燥と地温の上昇を防ぐ。
- ・かん水チューブや畝間かん水等により適宜かん水する。なお、昼間は、かん水チューブ、パイプ内の水が高温となるので注意する。
- ・育苗床やハウス栽培では、昇温防止のため換気に努めるとともに、遮光資材を展張することで日射を和らげ、施設内温度や作物体温度の低下を図る。細霧冷房による昇温防止も効果的である。
- ・トマト類やエンドウ・イチゴ等、高温期に播種・定植する品目・作型では、予め補植用の苗を準備しておく。また、施設栽培では早めに遮光資材を展張し、施設内温度や地温の低下を図る。
- ・ナス科果菜類では、高温乾燥により尻腐れ果が多発しやすいので、遮光資材の展張により温度低下を図るとともに、かん水により土壌水分の維持を図る。
- ・不良果等は早めに取り除き、草勢の維持に努める。
- ・追肥を行う場合、固形の化成肥料では吸収されにくいので、薄い液肥を施す。
- ・高温乾燥条件下では、ハダニ類、アブラムシ類等が発生しやすいので注意する。
- ・高温乾燥条件下では、作物体の温度も上がりやすく、農薬散布による薬害も出やすくなるので、薬剤防除は朝夕の温度の低い時間帯に行うように努める。

〔花き〕

- ・敷きわらや反射シートなどの被覆により、土壌の乾燥と地温の上昇防止に努める。
- ・かん水チューブや畝間かん水等により適宜かん水する。なお、かん水チューブ、パイプ内の水が高温となるので注意する。
- ・ハウス栽培では、昇温防止のため換気に努めるとともに、遮光資材を展張することで日射を和らげ、施設内温度や作物体温度の低下を図る。細霧冷房による昇温防止も効果的である。

- ・スターチスやカスミソウ等、高温期に定植するものは早めに遮光資材を展張し、地温を低下させてから定植する。
- ・高温乾燥条件下では、作物体の温度も上がりやすく、農薬散布による薬害も出やすくなるので、薬剤防除は朝夕の温度の低い時間帯に行うように努める。

〔水稲〕

- ・生育ステージに応じた適切な水管理に努める。
- ・出穂後約20日間の高温で品質低下しやすいため、用水が十分確保できる場合、かけ流しかんがいをを行い、根の活力の維持や水温上昇の抑制に努める。
- ・落水後、田面が乾燥するようであれば走り水程度のかんがいに努める。
- ・水源に乏しいところでは漏水防止や節水栽培等の合理的な管理を行う。
- ・なお、高温条件では、もみ枯細菌病やごま葉枯病の発生が懸念されるので、防除を怠らない。
- ・高温乾燥条件下では、作物体の温度も上がりやすく、農薬散布による薬害も出やすくなるので、薬剤防除は朝夕の温度の低い時間帯に行うように努める。